

〈近代本論第十三回：キーワードと年表〉

1. 年表

- 1712 ジャン=ジャック・ルソー誕生（～1778）
- 1724 イマヌエル・カント誕生（～1804）
- 1762 ルソー『社会契約論』
- 1769 ナポレオン・ボナパルト誕生（～1821）
- 1770 ゲオルク・ヘーゲル誕生（～1831）
- 1775～1783 アメリカ独立戦争
- 1776（7月4日） アメリカ独立宣言
- 1781 カント『純粋理性批判』
- 1788 カント『実践理性批判』
- 1789 フランス三部会招集、フランス革命開始
- 1791 フランス第一憲法（91年憲法）
- 1792 フランス王政廃止 第一共和政開始
- 1793 フランス第二憲法（ジャコバン憲法）
- 1793～94 ジャコバン党独裁、恐怖政治（ロベスピエール）
- 1794（6月8日）〈最高存在の祭典〉（ロベスピエール主宰の理性崇拜祭典）
- 1794（7月27日）テルミドールのクーデタ、恐怖政治の終わり
- 1795 共和国憲法発布（制限選挙）総裁政府樹立
- 1798 マルサス『人口論』――幾何級数的人口増加と算術級数的食料増加云々 →  
生存競争パラダイムの開始（→ 救貧法廃止、産児制限）
- 1804 ナポレオン、皇帝位に（～1815）
- 1805 アウステルリッツの戦い（三帝会戦）、ナポレオンの覇権確立
- 1807 ヘーゲル『精神現象学』
- 1809 チャールズ・ダーウィン誕生（～1882）
- 1812 ロシア戦役の失敗
- 1814～15 ウィーン会議
- 1814 ルイ十八世〈憲章〉公布、フランス王政復古
- 1815 ワーテルローの戦い ナポレオンの〈百日天下〉終わる
- 1816 ヘーゲル『大論理学』
- 1818 ヘーゲル、ベルリン大学へ招聘される
- 1821 ヘーゲル『法哲学』

- 1823 アルフレッド・ウォレス誕生（～1913）
- 1830 オルレアン公ルイ・フィリップ王位に、フランス七月革命
- 1831～36 ビーグル号世界周航
- 1838～43 ダーウィン『ビーグル号航海記』
- 1848 ルイ・フィリップ退位、フランス二月革命
- 1853 黒船来航
- 1858 日米修好通商条約締結
- 1859 ダーウィン『種の起源』
- 1869 ウォレス『マレー諸島』
- 1876 ウォレス『動物の地理的分布』
- 1909 ヤーコブ・フォン・ユクスキュル『動物の環境と内的世界』（ダーウィンの生存競争を環境論、機能論の立場から否定した）

※ 大原則の確認

- われわれの三つの時間（人類史、生物史、宇宙史）
- 時間はずねに複雑化の推進者だった
- 生物進化は物質進化の頂点に位置する
- 物質進化の原則は複雑化、拡散、共存である
- 生物進化もその原則を継承する

2. 生物進化モデルの二項分岐

- コスモスモデル ⇔ 淘汰モデル
- コスモスの原義は全体的秩序の美 → 美しき宇宙（星座）、装飾の美しさ
- アレクサンダー・フォン・フンボルト（1769～1859）
- 大著『コスモス』による、博物誌と地理学の統合
- 二十世紀の生態学を先取り
- 生態学的多型性を前提とするユクスキュルの生物学へ
- その立場からのダーウィン批判
- 淘汰モデル（ダーウィン、ウォレス）の前提は〈人口論〉である
- 彼らは生物種の〈絶滅〉にすべての意識を集中した

3. 生態系的調和は、拡散（棲み分け）、多型化を原理として造形される

- ゆるやかに連結された閉鎖系（湖沼等）が生物集団の自然環境となる
- その集団のすべては自然環境に〈適応〉しつつ放散する
- 〈生物社会〉（種社会）の〈棲み分け〉（今西錦司、1933年）
- アフリカの古代湖におけるシクリッド種（子育て魚）の短期間の多型化  
= 食べ分けによる棲み分け
- 同様の放散と多型化はあらゆる生物種に認められる構造原理である  
（ガラパゴス島における島嶼化的放散、パンダの自己ニッチ造形等々）

- 淘汰論はこれらの原理をすべて否定し、〈競争〉の原理で一元化する
  - 〈競争〉は〈絶滅〉を生み（彼らのモデルにおいて）、多型性を生まない
4. 進化レベルでの拡散、多型化は〈獲得形質の遺伝〉に反照される
- ラマルキズムの全否定
  - 遺伝子メカニズムによるラマルキズムの復活（現在地）
  - 木村資生の〈分子進化の中立説〉と本質連関
5. 十九世紀の〈欧米列強〉
- 産業革命による初期軍産複合体の成立
  - 〈文明化〉イデオロギーによる植民地主義の拡張
  - 黒船来航の背景
6. 進化論の実態
- 〈世界史〉パラダイムと融合して〈社会進化論〉へ
  - 〈文明化〉パラダイムを完成
  - 出発点はマルサスの『人口論』（1798年）の応用
  - 格差社会固定のための生存競争論を生物進化学に拡張したもの
7. 開港開国の齟齬
- 〈文明化〉イデオロギーによる列強の〈軍艦外交〉
  - 列強は日本を〈未開→文明〉のスカラ上に位置づけようとした
  - この力学は攘夷派にも開国派にもまったく見えなかった
  - 列強との対峙、戦闘、交渉において、日本はこの齟齬を実地に学ぶことになる（不平等条約が最大の「教材」となった）
  - 列強間での〈競争〉も、〈世界史〉、〈進化〉に規定された弱肉強食がらみ、〈悲劇〉含みのものであった
  - これも日本は実地に学習していくことになる
  - 薩長の背景のイギリスと、幕府の背景のフランスが次第に代理戦争的な競争に入ることになる
  - 木戸、西郷、勝等はこの力学を素早く正確に把握していた
8. 〈世界史〉パラダイムは、植民地主義、奴隷制度を正当化した
- ヘーゲルの〈自由〉の進歩パラダイム（引用1）
  - 1. 東洋は一人だけが自由（専制政体）
  - 2. 古典世界（ギリシア、ローマ）は少数が自由（古代市民、他は奴隷）
  - 3. ゲルマン（ヨーロッパ）は人間が本来自由であることを知っている云々
  - 奴隷制度は人倫の高次の段階に「参与」するために必要（!）（引用2）

## 引用 1

〈自由の意義の区分について、一般的に述べるとこうなる。東洋人は一人の者だけが自由であることを知っていた。これに対して、ギリシア人とローマ人は、少数の者が自由であることを知っていたにすぎない。これに対してわれわれは（現代ヨーロッパ人は）、すべての人間が本来自由であること、すなわち人間が人間として自由であることを知っている。そのことはまた、世界史の区分と、世界史をいかに取り扱うべきかという方法とも関連している。〉（ヘーゲル『歴史哲学』〈序論〉 78 p）

## 引用 2

〈奴隷制度も、国家の中の制度として存在する場合には（※封建制の農奴たちとちがいの意味）、たんに個別的な、感性的な存在から進歩するための一つの契機であり、教育の一環であり（!）、換言すれば、高次の人倫と、この人倫に結びつく文化に参加するための、一つの手段である。人間の本質が自由にある以上、奴隷制はそれ自身としては不正である。だが人間は、だんだんに自由に成熟していくのでなければならない。それゆえに、漸進的に奴隷制を廃止していくほうが、急激な廃絶よりもかえって妥当であり、より正しいように思える。〉（同上、上、210 p）

## 9. 進化論の展開

- ダーウィン、ウォレスはともに博物学者だった
- 生物分布を調査して、自然の伝播拡散では説明できない欠落に気づいた
- それを「大絶滅」の結果であると考えた
- その「大絶滅」は、個体数の増大による資源の奪い合い（弱肉強食）によるものだと仮説を立てた（＝マルサス『人口論』の応用）
- 自然淘汰のモデルに辿り着いた
- 自然淘汰は種進化と同義である
- 人口論に反照して、人種の優越、弱肉強食、「大絶滅」を含意することになる
- 人口論 → 生物モデル → 社会進化論への復帰
- 根本の運動は、十九世紀的「競争」の正当化モデルである

## 10. ダーウィン進化論の出発点

- ガラパゴスのフィールド調査以前に仮説の模索が始まっていた
- ガラパゴスは〈島嶼化〉による生物多様性の宝庫だが、ダーウィンはその多様性をすべて〈自然淘汰〉の結果だとする逆説を示す（淘汰は種数を減らす原理である）
- この自己矛盾はつまりそれ以前の仮説構築の影響である
- ダーウィンの原・進化論仮説

- マルサス『人口論』から、種数の増加に見合わない資源の増加、結果としての資源の奪い合い、大絶滅の図式を思いつかべた（引用3）
- それを博物学で検証された生物分布の謎と重ね合わせた（引用4）  
（地史の激変、生物種の均等な伝播拡散では説明できない多くの欠落）

### 引用3

〈たしかに、この世界の長い歴史の中で、広範な、また幾度となく繰り返された生物の滅亡ほど、人の心を驚かさず事実はない。……

食糧の供給は、平均してみると一定の量にとどまっている。しかしすべての動物の繁殖と増加の傾向は等比級数的である。〉（ダーウィン『ビーグル号航海記』1834年1月9日、上、263p）

### 引用4

〈これはマルサスの原理を、全動植物界に適用したものである。どの種でも、生存できるよりずっと多くの個体が生まれ、したがって頻繁に生存競争が起こるので、なんらかの点でたとえわずかでも有利な変異をする生物は、複雑でときおり変化する生活条件のもとでの生存の機会にめぐまれ、そのようにして、自然に選択される。遺伝の確固たる原理にもとづき、選択された変種は、どれもその新しい変化した形態をふやしていくことになる。〉（ダーウィン『種の起源』〈序言〉、上16p）

#### 1 1. マルサス『人口論』と産業社会的生存競争のイデオロギー化

- 匿名出版の年1798年は、フランス革命からナポレオン帝制への移行期
- 革命拡散への危機感がイギリスには根強かった
- 人口増加は幾何学級数、食料増加は算術級数云々
- 産業革命が可能にした初期の人口爆発を反映
- その人口爆発は下部構造の変革に伴う自然発生的なものだった
- それをマルサスは〈危機〉として誇張した
- 〈危機〉はつまりは〈格差の平準化〉の危機である
- これも機械情報革命に内在する原理であった
- マルサスはこの〈危機〉を生存競争論により乗り切ろうとする
- 産児制限と救貧法の廃止（みせしめとしての貧困状態）
- それは〈文明化〉イデオロギーの一環となった
- マルサスの生存競争論を内包する生物進化論も、この〈文明化〉イデオロギーを当初から内包している
- 社会進化論への〈自然な〉展開

#### 1 2. ダーウィン進化論のトートロジー

- 客観的資料（生物学的資料）は生物分布の不均一な偏差のみだった
- その偏差を〈大絶滅〉の結果ではないかと考えた（このアイデアがすでに十分にマルサス的であることにダーウィンは気づいていない）
- マルサスのモデルが〈人口増加による大絶滅〉を予見していた
- それを生物学に応用すると、〈大絶滅〉が説明可能となった
- マルサス的アイデアをマルサスモデルが〈証明〉するというトートロジーが進化論を生むことになった

### 13. ダーウィンの実見した〈大絶滅〉は原住民のホロコーストであった

- 南米における〈インディオ戦争〉の酷薄は『航海記』に記録されている（引用5）
- 〈文明化〉イデオロギーの非・人間性の記録
- しかしダーウィン自身も、人類種を〈文明⇔野蛮〉の二項対立上でとらえていた（引用6）
- それは〈亜種化〉を含意した未開である
- 現代人類における種分化の含意 → 優生学へ

#### 引用5

〈インディオたちは、老若男女をあわせて110人ほどだったが、ほとんど全部が捕らえられたり殺されたりした。……二十歳を越えたと思われる女性は、無惨にもことごとく虐殺された。わたしはそれを非人道的だと抗議したのだが、兵卒は、「でもやむをえませぬ。どんどん産みますからね」と答えただけだった。

この土地では、すべての人が、その戦争は野蛮人に対するものだからという理由で、正義そのものだと確信している。〉（ダーウィン『ビーグル号航海記』〈パイア、ブランカ〉上159p）

#### 引用6

〈野蛮人と文明人の隔たりがこれほど大きなものだと信じられない思いだった。人間にはそもそも改善の能力がある。だからこの差は、野生動物と家畜の間の差よりも大きいことになる。〉（同上、1832年12月17日、中48p）

### 14. フンボルトの〈コスモス〉 ⇔ ダーウィンの進化論

- 博物学（形態学）と地理学の結合
- アレクサンダー・フォン・フンボルト（1769～1859）のモデル
- ダーウィン、ウォレスの生物地理学の祖型

- しかしフンボルトの〈コスモス〉の理念が、二人には欠如
- 〈コスモス〉は生態学のプロトタイプである
- 〈コスモス〉は生物多様性の原理であり、〈自然淘汰〉はそこにはない
- 生態系を飛び越えて種を〈全体進化〉と直結する理論の無理  
(種はつねに環境における種である)

#### 1 5. 進化論における個体の飛び越え

- 博物学者は新種の発見に集中する
- 種の形態に意識をとられ、個体差を忘れる
- 適応はすべて個体の適応であるのに、それが種一般の適応であるかのように抽象化される
- 種主体の認知は、個体の観察を貧困化した
- ⇨ 今西グループによる生物個体の観察による革新

#### 1 6. 進化論の種間闘争はヘーゲル〈世界史〉における国家間闘争とパラレルなモデルである

- 進化の主体が種であるように、世界史の主体は国家だとされた
- 国家は「実体的に完全な主体＝精神」となる(引用7)
- 主体である国家は生存権を持つ → 戦争の権利の発生(引用8)
- 国家の戦争権はグローティウスの〈戦争法〉の概念にすでに含まれていた
- 国家は個体を統合する〈制度一種〉であると見れば、〈世界史〉の戦争状態と〈進化史〉の種間闘争がパラレルな構造を持つことがわかる
- 国家間闘争に固執する〈世界史〉は、民族、国家の多型性、多様性を破壊する原理となる
- 種間闘争に固執するダーウィン、ウォレス型の〈進化史〉は、生物の多型性、多様性を破壊する原理となる

#### 引用7

〈完成された国家は、共同体としてのまとまりを持ち、自由を実現している。自由を実現することこそ、理性の絶対的な目的である。国家はこの世界に現存し、この世界に実現され、意識にもたらされた精神そのものである。〉(ヘーゲル『法哲学』第三部〈共同体の倫理〉500p)

#### 引用8

〈国家は守られねばならないが、それは国家の目的が市民の生命、財産の保護にあるからではない。そういう目的しかないのなら、国家を守るために生命を危険にさらすのは、矛盾であり、本末転倒といことになるだろう。〉

そうではなく、共同体にとっては、個々の成員という要素を否定した、国家の理念的統一が絶対的に必要なのである。それは目に見えるすがたをとらないといけない。したがって戦争は、外から偶然やってくるものではなく、国家の必然的な要素である。国家の独立を守ること、そこに理念的統一の本質がある。〉(同上、589p)

#### 17. 現実の生命進化は〈進化論〉モデルを完全に否定する

- ダーウィン系統樹の自己矛盾
- 系統樹は多型性、多様性への拡散を示す ⇔ 自然淘汰は一種への収斂理論
- 個体間の競争を種間競争に拡大する根拠はない
- 個体間競争は、むしろ種の拡散の原理(繁殖期のテリトリー行動等)
- 種間の競合は、〈棲み分け〉、〈食べ分け〉により多様化を促進
- どのような〈下等な〉種も、環境が許せば存続を続ける
- 物質進化の定常項(ヘリウムも水素も宇宙初期から現在まで存在)
- ユクスキュルによる根本的な批判(引用9)

#### 引用9

〈「進化」、または発展は、系統樹的な分岐が減少していくということを指示している。しかし進化論者は、逆に「進化」という言葉を使いながら、生物の世界で実際に観察される多様性の増大、つまり、まったく単純な体制のアメーバから出発して、哺乳類にまでいたる、定量的に増大するその生物多様性そのものを指し示そうとする。しかしここで実際に起きているのは、〈進化〉、つまり少数種への収斂ではなく、その逆の〈複雑化〉であり、それが事柄の本質である。〉(ユクスキュル『理論生物学』)

#### 18. 十九世紀的現実の進化論への反照

- ビーグル号はイギリス海軍の測量船として、植民地支配の前線にいた
- ウォレスのフィールドであるマレー諸島も、すでにイギリス支配下にあった
- 植民地の拡大と、博物学のフィールド拡大の共振は列強のすべてに見られる基本現象である
- シーボルトの博物学もこの延長上にあった(オランダとプロイセンの共働)
- ダーウィン、ウォレスなしの進化論は可能だった
- 少なくとも生物進化論が〈文明化〉イデオロギーである『人口論』と結合する必然性はまったくない(あまりに文明臭い、人間臭い進化論)
- 〈コスモス〉理念からの進化論
  - = 多様性、多型性を基軸とする生態系進化論
- その可能性はいまだに潜性態である



- ダーウィンを生物学のヒーローとし続けるナンセンスも、一つの〈文明化〉イデオロギーの残存形態である

#### 19. 〈文明の進化〉パラダイムの登場

- オーギュスト・コント（1798～1857）
- 近代社会学の出発 = 産業革命の自画自賛
- 学問進化のモデル：中世的神学 → 啓蒙的形而上学 → 近代科学
- 社会進化のモデルに照応：中世的封建 → 法治国家 → 自由放任
- 法治を産業に対する桎梏ととらえる感覚 = ブルジョワ政経万能主義

#### 20. 十九世紀的文明国体論の闇

- 生物進化論が社会に適用されたのではなく、生存競争的社会の現実がまずマルサスの『人口論』を生み、それがダーウィンとウォレスの進化モデルの中核部を形成した
- ヘーゲル的〈自由〉の概念も、軍産的列強の自尊心がすでに懐胎しており、それが集団理念への拡張されたものと考えべきである
- つまり十九世紀的生存競争が、〈勝ち組〉（であると自己同定した）の列強間で〈文明化〉の国体論を生んでいった
- その〈文明化〉イデオロギーが黒船の〈軍艦外交〉となって、日本に開港開国を迫ることになる
- 擬似科学理論としての人種理論、黄禍論のヒステリア、白人至上主義
- 〈自由を実現する世界史〉から〈文明進化の科学〉へのパラダイム進化が、幕末維新の時期と重なる
- 家産国家型の妄想は東西を問わず、十九世紀の闇の論理となっていたことが確認できる
- 十九世紀は人文性の闇の時代となった

#### 21. 〈文明化〉イデオロギーの残響

- ハンチントンの〈文明の衝突〉論（1996年）
- 近代文明の一元性を否定 → 複数の文明の相克
- 国家主体が文明主体へと拡張されただけで、立論の基軸はあいもかわらぬヘゲモニー闘争論、〈文明〉の明確な定義すらない粗雑な印象批評の集積
- 〈われわれの文明〉クリシェーの主体
- MAGA や白人至上主義極右団体
- その意味で十九世紀的〈文明〉イデオロギーを継承
- すべての文明イデオロギーを社会病理学的な見地から診断し、根絶しなければならない
- 優性学の思いがけない残存
- スウェーデンのコロナ対策は弱者切り捨てだった

- 〈集団免疫の獲得のための犠牲〉云々
- 典型的に優生学的発想であり、それが医学界の大物たちから提唱された事実  
に驚かされる

## 2 2. 〈文明〉時空の透明化、中性化が不可欠

- 〈文明〉イデオロギーの脱色
- 人類の〈世界史〉は、第一革命以降の文明現象であるという共通認識の堅持
- われわれの定位時空の、人類史、地史、宇宙史への連続的拡大
- その最大限の透明な（賢治の意味での透明性）時空により、よどんだ汚物を含む  
〈文明〉時空を澄清化すること
- われわれの時代の自己啓蒙の課題（本論の課題）
- われわれの心性の基底に眠る健全な人文精神を最大限度覚醒すること
- その人文的時空から〈文明〉時空のよどみと病理を正しく認識する

## 2 3. 幕末維新の日本にとって、〈文明化〉は〈他者〉のイデオロギーだった

- 列強による自他の峻別を予感しつつも、志士たちは〈万国公法〉の理念に共振  
する（坂本龍馬、岩崎弥太郎他）
- 国際貿易の互惠性
- この理念は不平等条約の現実に曝される
- 明治国家の自立の道の模索
- 他者の文明優越論に対し、自己の文化固有論の伸張は、やがて国体論的専制志  
向を生む
- 〈軍艦外交〉と〈亜細亜の列強からの解放〉（大アジア主義）のイデオロギー  
弁証法
- 明治後半期からの国権論の伸張
- 原点としての〈文明化〉イデオロギーとの対峙を検証する（次章）

（近代本論第十三回キーワード終わり）